

はじめに

Introduction

森本 一夫

Kazuo MORIMOTO

This special issue, titled “Muslims, Islam, and the Kinfolk of ‘Alī: Discourses on the ‘Family of Prophet Muḥammad’ and Their Proponents,” published as volume 103 of *Tōyō-Bunka (Oriental Culture)*, explores Muslim discourses on the special status and role of the kinfolk of ‘Alī, who are perceived as the “Family of the Prophet Muḥammad.” Beyond elucidating the relevant discourses with an attention to commonalities and diversities among them, the contributions also shed light on the milieus where the discourses were generated or circulated. This special issue notably addresses differences in the discourses between Sunnis and Twelver Shi‘is and examines not only perceptions of *sayyids* and *sharīfs* but also those of the Twelver Imams by the members of both groups.

預言者ムハンマド（632年没）の父方のいとこにして娘婿であったアリー・イブン・アビー・ターリブ（661年没）とその一族の人々はイスラーム史を通じて目立った存在であり続けてきた¹。シーア諸派のイマームとして、スー

* 本稿は JSPS 科研費 19H01317, 19H00564 による研究成果の一部である。

¹ 以下、「はじめに」では、「アリー一族」という言葉を、主としてアリーとファーティマおよびその子孫を含意しつつ、同時にそれ以外のアリーの子孫やアリーの兄弟およびその子孫をも必ずしも排除しないものとして用いる。一族成員としての立場は男系で受け継がれるのが基本であるが、本特集（特に河原弥生論文）でも扱われるように女性を通じた継受が認められていた地域や時代も珍しくなかった。なお、「一族成員」「一族の人々」やそれに類する表現は「一族と称する人々」や「一族とされる人々」をも含意することとする。さらに用語に関して付言する。本特集の諸論文では、著者の考えや史資料中の語彙などに応じてさまざまな用語法がとられる。しかし、例えば16世紀時点でのアリーの（男系）子孫といった、血統はともにするもののみならず「イエ」をなしていたとは考えられないような人々の集まりに対しても慣習に従い「アリー家」という言葉を使う著者と、そうした集団に対しては「アリー裔」を用いる著者とがいることを

フィー教団の指導者として、王朝の創始者とその跡を継ぐ者たちとして、あるいはマフディー（Mahdī；神に導かれた指導者、終末の救世主）を称す蜂起の指導者として、歴史書を繰る我々は、さまざまな文脈で人々の先頭に立ったアリー一族成員の姿を見いだすことができる。それだけではない。事件史上に名を残したそうした人々が、現在にいたるまでこの世に生きたアリー一族成員のごく一部を占めるに過ぎないことも疑いようのない事実である。アリー一族の人々は、おおよそ9～10世紀ころには、折から住民の本格的なムスリム化が進んでいたとされる当時のイスラーム圏各地の地域社会に広く見られる存在となり、「サイド」(sayyid)と「シャリーフ」(sharif)という、その特別な血統を際立たせる尊称で呼ばれるようになったと考えられる²。ムスリム諸社会のごく当たり前の構成要素となった彼らは、社会の多様な層にわたって分布するようになった。社会的弱者であるアリー一族成員の存在は、サイドやシャリーフにどう接しなければならぬかを説く逸話類が、彼らのうちの貧窮した者たちに手を差し伸べるべきことをなによりも強調していることに端的に示されている³。王から物乞いにいたるまでの社会の各層にアリー一族の成員であるサイドやシャリーフが見られるという状況は、現代においても変わっていない。

アリー一族の人々の立場や役割は、さまざまな環境に生きる多様なものの考え方を持ったムスリムによっていかに論じられ理解されてきたのか、そうした「語り」は語られる対象だけでなく「語り手」に関し何を明らかにするのか。『東洋文化』のこの特集号は、これらの問いを中心に、ムスリム諸社会におけるアリー一族という主題に取り組む。アリー一族が信徒共同体（ウンマ）のそれ以外の人々と区別されるべきとされる際の根本的な理由は、彼らが「預言者ムハンマドの一族」(以下、「預言者一族」と考えられているこ

踏まえておけば、概念上の混乱は起こらないはずである。

² Kazuo Morimoto, "The Formation and Development of the Science of Talibid Genealogies in the 10th & 11th Century Middle East," *Oriente moderno* n.s. 18-2 (1999): 541-570; Teresa Bernheimer, *The 'Alids: The First Family of Islam, 750-1200*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2013. C. van Arendonk [W. A. Graham], "Sharif," in *The Encyclopaedia of Islam, New Edition*, H.A.R. Gibb et al. (eds.), 13 vols., Leiden: Brill, 1960-2009, 9: 329-337 も参照。

³ Kazuo Morimoto, "How to Behave toward Sayyids and Sharifs: A Trans-Sectarian Tradition of Dream Accounts," in Kazuo Morimoto (ed.), *Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet*, Abingdon, Oxon and New York: Routledge, 2012, 15-36.

とである⁴。信徒共同体内でのアリー一族の立場と役割をめぐる言説は、そのまま「預言者一族」の立場と役割をめぐる言説と置き換えて考えてよい場合が多い。この特集号は「『ムハンマドの血筋』とムスリム：アリー一族をめぐる多様な語りと語り手たち」と題されているが、そのうち主題部分はこのことを踏まえている。

この特集号は、このような形でアリー一族の問題を取り上げることは、イスラーム研究やイスラーム史研究、またムスリム多数派地域の地域研究といった、イスラーム教とムスリムに深く関わる諸領域の研究に資するという考えにもとづいて編まれている。アリー一族は、イスラーム教とそれを信じる人々の初期的な集団が西暦7世紀に産声をあげて以来、いま現在にいたるまで、つまりイスラーム教とムスリムたちが関してきた歴史の全過程を通じて、信徒共同体内の特別な人々として存在し続けてきた。当然ながら、長い歴史のなかでは彼らの帯びた「特別な人々」としての意味合いも転変を経ているが、そのような転変の解明は、イスラーム教とムスリム諸社会それ自体に起こった通時的な変化—グローバルなものもローカルなものも含め—を炙り出す手段となるはずである。加えて、彼らを経てきた歴史は、共通の血統や歴史を持つ人々が、さまざまな意味で個性を異にする多様な環境のなかで世代を重ねてきた歴史と言い換えることができる。そうであるならば、彼らの立場や役割について特定の環境—たとえば地域社会や宗派集団—で観察される言説は、その環境の個性を反映するものとなっているに違いない。アリー一族の立場や役割をめぐる言説の解明は、ムスリムが各地で形成してきた諸社会やイスラーム教内部のさまざまな宗派や思潮の個性を、その歴史的变化をも視野に入れながら、独自の視点から浮かび上がらせることにつながると期待されるのである⁵。

⁴ ここではアリー自身を神格化する少数派の場合は除いて考えている。なお、ここでことさら「預言者一族」を「」で囲っているのは、これが論者によってその血統上の範囲などを異にしうる仮設的な概念であることを示すためである。また、ここでの「預言者一族」は、「血統的な近さの持ち主たち」(Dhawū al-Qurbā), 広い意味で用いられた際の「お家の人々」(Ahl al-Bayt), 「ムハンマド一族」(Āl Muḥammad) といった何らかの原語に厳密に対応するものというよりは、そうした言葉が重なり合うなかでおおよそその範囲が定まっていると見なすことができるような対象を指すものとする。

⁵ 筆者は、彼らをめぐる言説の研究をその大きな柱とすべき「サイイド／シャリーフ論」(sayyido-sharifology) のこのような射程について議論してきた。Kazuo Morimoto, "Toward the Formation of Sayyido-Sharifology: Questioning Accepted Fact," *The Journal of Sophia Asian Studies* 22 (2004): 87–

このような可能性に照らして見るとき、アリー一族に属す人々をアリー一族であるという共通の属性に即して一括し、単一の問題意識のもとに考察するような研究の蓄積がいかに乏しく感じられるということも、アリー一族に関する「語り」に着目するこの特集号の背中を押している。このような現状は、一方では、アリー一族をめぐる諸問題がシーア派という問題系に回収されがちであったことに起因すると考えられる。このことは、「シーア派」という言葉が、アリー一族の者たちに信徒共同体の指導権を認めるさまざまな思想潮流やアリー一族成員による政治運動に広く適用されうるイスラム史の最初の2~3世紀ほどに関して特に顕著であろう⁶。また一方では、各地でサイドやシャリーフが顕著な動きを見せ研究対象とされた場合においても、彼らは「聖者」や「王」といった個別的な属性に即して取り上げられることが多く、アリー一族成員としての側面が深く検討の対象とされることはまれであったことも指摘できる。「サイド／シャリーフ論」(sayyido-sharifology)と呼ぶことができるような研究の枠組みが形をとってきたと言えるのは、せいぜいこの20年強のことなのである⁷。このような事情から、アリー一族がさまざまな環境でいかに論じられ理解されてきたかという問題に関する我々の知識はいまだ初歩的な段階にある。この特集号は、このような状況のなか、一歩でも二歩でも歩みを進めようとするものなのである。

では、この特集号はその一歩、二歩をどのように踏み出そうとするのか。研究の現状に鑑みれば、10名の寄稿者がそれぞれの専門性に応じ、さまざまな環境下でのアリー一族をめぐる言説の内容や扱われ方を考察するというそのことだけですでに貢献と呼べようが、それに加え、筆者は、以下の二つの特徴がこの特集号の貢献をより実質的なものとしていると考えている。一つは、「アリー一族をめぐる多様な語りと語り手たち」という副題が示すよ

103; 森本一夫「サイド・シャリーフ研究の現状と展望」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹(編)『イスラムの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、2005、229-254; Kazuo Morimoto, "Sayyido-Sharifology: Personal and Collective Endeavors to Define a New Research Field," in Yasushi Tonaga and Chiaki Fujii (eds.), *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies*, Kyoto: Kenan Rifai Center for Sufi Studies, 2018, 47-54 参照。

⁶ 「シーア派」という語の、このような意味での緩やかな使用は、イマーム派、十二イマーム派、イスマーイール派、ザイド派といったシーア諸宗派(分派)の輪郭がはっきりしてくるそれ以後の時代に関しては難しくなるものとする。

⁷ 注5で挙げた拙稿を参照されたい。

うに、寄稿者一同が、アリー一族をめぐる言説それ自体の考察に留まることなく、言説を取り巻く人々や環境のありようにも論及すべく努め、論文執筆を行ったことである。アリー一族をめぐる言説に関し全般的な見取り図さえない状況のもとで、研究対象から読み取れる特定の言説を手がかりにその文脈にまで論及するというのは大変困難な仕事である。しかし、アリー一族に関する言説の研究がそれを一回りも二回りも超えた問題系での研究にインパクトを与えうることを示すには、それを実際に行い、結果を示す必要がある。どこまでできたかについては書き手側でもう少し時間をおいて見返してみる必要を感じているが、まずはそうした試みをまとまった形で行ったことに意義を見いだしているところである。

筆者がもう一つのセールス・ポイントと考えるのは、この特集号が、スンナ派とシーア派、なかんずく十二イマーム・シーア派（以下、十二イマーム派）それぞれのアリー一族観の間に存在する共通点と相違点を考えるという、重要な主題を掘り下げるものとなっていることである。アリー一族を「預言者一族」と認め、彼らには何らかの特別な立場や役割があると考えることが、スンナ派とシーア派をまたいで広く見られる態度であることはつとに知られている。それは特にサイド／シャリーフの処遇やアリー一族一般に対する崇敬に関して言われてきたことであるが、同時にスンナ派側の崇敬が、しばしば十二イマーム派のイマームたち（十二イマーム）の特別視をも内包するものとなっていることも知られている⁸。しかし、アリー一族や十二イマームの特別視に見られるそうした超宗派性はどのように生じてきたものなのか、あるいは超宗派性を前提とした上で両派の理解を精査した場合にどのような共通点と相違点が見いだされるのかといった問いについて、我々は確たる答えを持たない。以下の内容紹介でも示されるように、この特集号は、この問題を考える上で重要な前進をしているものと自負している。

では、この特集号を構成する三つの部の内容を簡単に説明しよう。「第一部 サイド／シャリーフの立場をめぐる語りと語り手たち」が扱うのは、各地に広く分布するようになったアリー一族一般の信徒共同体における立場と役割に関しさまざまな環境のもとで何が語られてきたか、そのことは語り手について何を明らかにするかという問題である。それぞれ 10 世紀と 21 世

⁸ 本特集号の水上遼論文冒頭部、特に注 1 を参照。

紀の十二イマーム派学者によるテキストを扱う吉田京子論文と森本一夫論文、15世紀の南アジアと20～21世紀のインドネシアという、周縁性を帯びた二つのスンナ派的环境で著された諸作品を分析する二宮文子論文と新井和広論文を収録する。十二イマーム派を扱う二論文では、イマームとウラマーという、同派が指導者としての権能を認める二つの代表的な存在の位置づけとサイド／シャリーフの位置づけとの関わり合いが考察され、イマーム論の確立を使命としていた10世紀のある代表的な学者の姿、イラン・イスラーム共和国体制下という執筆状況の含意にそれぞれ光があてられる。二宮論文と新井論文はともに、「あるべきイスラーム社会」の建設が課題となる際、またその記憶が語られる際に、サイド／シャリーフに対する処遇や彼ら自身の役割という話題が喚起されることを示す。また、二宮が扱う作品にスーフイズムの論理と文法が充溢していること、新井が議論するテキストの一つからは不行状な成員の存在が重要なトピックとなることが読み取れることなど、サイド／シャリーフをめぐる言説を取り巻く大小の文脈と状況に関する意義深い知見が呈示される。

第二部「イマーム崇敬と宗派性」は、アリー一族のなかでも十二イマーム派によって無謬のイマームとされる人々に焦点を絞り、彼らに対する崇敬と崇敬者の宗派帰属・宗派自認との関係を問う。上記のように、十二イマーム派のイマームたちに対する崇敬が必ずしも十二イマーム派（やシーア派）だけに認められるわけではないことは知られている。しかし、スンナ派を自認する人々の間でイマームたちが具体的にどう理解されてきたかという問題—それは往々にして「シーア派」という他者を前提とした自己規定という要素を含む—は、これから深められていくべき問題である。そしてその射程は、預言者に連なる血筋一般に対する特別視と宗派性との関わりという問題や各地のサイド／シャリーフが往々にして帯びるように見受けられる微妙な宗派性（「彼らに見られるのはシーア派性なのか出自集団としての誇りなのか」といった問題にも及ぶものとなる。この第二部では、まず杉山隆一論文がサファヴィー朝末期のイランで成立した作品を素材として十二イマーム派におけるイマーム表象を論じ、次いで森山央朗論文と水上遼論文がスンナ派的环境に関する考察を深める。ある著名なハディース学者によるアリー崇敬の表明をめぐる後代の評価と第12代イマームを終末のマフディーとする教説をめぐる態度をそれぞれ扱う両論文からは、時と場合に応じた偏差や競い合

う党派間での「レッテル貼り」といった要素が複雑に絡み合う独自の場としてのスンナ派の十二イマーム言説のありようが浮かび上がってくる。

第一部と第二部が言説の内容それ自体を整理・分析し、そこからその担い手やそれを生み出した状況という問題に切り込むものだったとすると、第三部「サイド／シャリーフ血統をめぐる多様な状況と戦略」は、「預言者一族」を特別視する言説によって意義づけられた特別な血統という資源が、それを主張する個別の出自集団によってどのように扱われ、利用されてきたのか、集団の成員の生にどのような影響を及ぼしてきたのかを問う。言説と現実の接合面に視線を据え、そこから言説と現実の両方を見晴らすかすという構えである。18世紀後半の雲南に取材する中西竜也論文が浮き彫りにするのは、ムハンマドに連なる血統を主張する集団にとって、そうした血統は、状況や媒体、そして受け手に応じて表に出したり出さなかったりする複数の持ち駒の一つに過ぎない場合が多いという事実である。中西が扱うのはムスリムがマイノリティとして暮らす環境であるが、ムスリムが優勢な社会のことを考える際にも示唆に富む。続く河原弥生論文は、コーカンド・ハーン国のハーン家によるサイド／シャリーフ血統の主張という文脈のなかで19世紀前半に作成された一通の文書を読み解く。問題の血統主張についての新事実を掘り起こすだけでなく、母方を通じた血統の継受という問題が当時のフェルガナ盆地でどのように理解されていたのかにも光をあてる。特集を締めくくるのは白谷望による論文である。「王家」や「王族」のあり方をめぐる世界的な趨勢にあわせて変化する近年のモロッコ王家の女性成員の姿を描き出すこの論文は、許容されうる変化とされえない変化の選別にムハンマドに連なる血統が関係していることを示す。変化が見られない領域とは婚姻関係であり、シャリーファ（女性シャリーフ）である女性王族たちの婚出先としては今もシャリーフが選好されるという。

言うまでもなく、この特集号の注目点として指摘されるべきは、上で述べた二つの全般的な特徴に限られるものではない。母方からの血統の継受や婚姻戦略といった女性をめぐる問題に新たな知見を提供していることなど、この特集号はほかにも魅力を持っている。書き手側では気づいていない魅力も必ずやあるであろう。

この特集号は、2022年度で4年間の研究期間が終了する科研費基盤研究(B)による共同研究「ムハンマド一族をめぐる諸言説に関する研究：イス

ラーム史研究の革新をめざして」(19H01317)の主要な研究成果として刊行される。この共同研究は、開始後1年もしないうちに始まったコロナ禍により大幅な計画の縮小を強いられた。文献調査やフィールドワークのための外国出張がほぼできなかったのに加え、メンバーが集まったの研究会も、外に向けた研究成果発表のための国内外の研究集會も、もっぱらオンライン頼みという状況となった。加えてメンバーの研究時間も、コロナ対策のために激増した教育・運営面での仕事にかなりの規模で取られることになってしまった。素材という面からも、着想という面からも、時間という面からも、何か新しいことを始めようとするのに大きな制約がかかる難しい状況のなかで、どうにか進めてきた共同研究となったように感じる(新しいことに手をつけるという局面で、研究仲間との、対面の、互いの息づかいを感じながらの対話がどれほど大事であるか、オンラインではそれがどれだけ減殺されてしまうかを実感した)。そのようななか、2021年9月にはオンライン・シンポジウムを開催してまとまった成果を示すことができ、さらにシンポジウムでの議論を踏まえてこの特集号を編むことができたのは、ひとえにメンバー諸氏の粘り強い努力のお蔭である。最終的に日本語での成果刊行を選んだために寄稿依頼を断念することとなったジュリアン・ルヴェスク (Julien Levesque) 氏も含め、11名の共同研究メンバーに篤く御礼申し上げる。

アリー一族に関する研究では、教義をめぐるウラマーの議論から人々の泥臭い日常の営為までのさまざまなレベルの問題の間に有機的な連関を見だし、それを説明することが求められる。したがって、ムスリムとその社会しか対象とならないという限界を持つものの、なんらかの信仰—あるいはより広く信念なり価値観—とさまざまなレベルでの社会の動きとの相互関係のあり方を考えるのに有用たりうる。そうした意味では、イスラーム(史)研究やイスラーム理解をこえた射程を持ちうる主題である。同時にこの問題系は、まさにその魅力の裏返しと言えようが、ウラマーによる難解な教義論を読み解く能力からイスラーム圏各地でさまざまな時代に成立していたローカルな環境に関する知識まで、実に多様な素養の動員を必要とする。この特集で試みたような協働が特に強みを発揮する主題であると言えよう。ここに集まった10名の寄稿者とルヴェスク氏とで進めてきた共同研究はこの特集号の刊行と前後して終了するが、この特集号が、次なる協働の種を撒くものとなっていればと念願する次第である。